

多くの命を救った外交官 杉原千敏

八百津で生まれた千敏の生い立ち

千敏さんは、1900年（明治33年）一月一日八百津町の北山で生まれました。父の仕事の都合で小学校の高学年のころは名古屋に住んでいました。

中学校に進んでからは、英語が得意で、将来は英語の先生になろうと考えていたそうです。

中学校を卒業して早稲田大学に進みました。英語教師になる夢を目指し勉学に励みますが、生活が苦しくなり、国のお金で勉強ができる外交官留学生試験を受けました。一生懸命に勉強してその試験に合格した千敏さんは、ロシア語研修生として、中国のハルビン学院というところへ行きロシア語を学びました。

ロシア語の得意な千敏さんは、外務省の役人になりハルビンの日本大使館に勤めました。

外交官としての千敏の仕事

1937年（昭和12年）フィンランドのヘルシンキにある日本大使館で勤めていましたが、次の年に、リトアニアのカウナスにある日本領事館の領事代理になりました。

外交官となった千敏さんは、ヨーロッパ全体が、いつ戦争になるかもしれないと思い、いろいろな報告書をまとめ、日本の外務省やドイツの日本大使館に送りました。

このころのヨーロッパでは、戦争が始まり、ユダヤ人が危険な目に遭うようになってきました。

戦争が激しくなったため、ユダヤ人が苦しめられることが多くなり、ユダヤ人は住むところをかえなくてはならなくなりました。しかし、ユダヤ人を受け入れるところはヨーロッパの中にはほとんどなくなってしまいました。

ビザを求めるユダヤの人と千敏の決断

1940年7月、千敏さんにとって、ある決断をしなくてはならない出来事が起こりました。

ある朝、いつもは静かな領事館の外側が、何やら物騒がしきでいつぱいになっていました。鉄の門にびっしり人だかりがして何やら叫んでいるのです。

まわりの鉄柵にも、ぐるりと大勢の人たちがかまって大声を出しているのです。

千敏さんは、代表者を領事館の中に招きました。みんなは思いつめた様子で口々に話し始めました。

「ユダヤ人はほかの民族とちがった宗教を信じているので、多くの国から仲間に入れてもらえなくなりました。」

「ユダヤ人の仲間は、ほかの人々より一生懸命に働きました。そして、お金持ちの仲間があらわれたので、ほかの国からますます仲間外れになりました。」

「ドイツの指導者が、ユダヤ人に対して、自由なことをしてはいけないと言うようになってきました。そして、そのドイツがポーランドへ攻め込んできたのです。」

「われわれは、ポーランドからこのリトアニアに逃げてきました。でも、ここもすぐに戦争になるでしょう。そうすると、私たちは住むところがなくなるのです。安心して暮らせるところがないのです。」

「私たちは、安全な国へ逃げたいのです。そのために、日本通過のビザをいただきたいのです。どうかビザをいただけませんか。」

ユダヤ人が安全であるためには、ユダヤ人を受け入れてくれるアメリカやそのほかの国に逃げる以外に方法がありません。

ヨーロッパから逃げるために、彼らは、シベリアを通って外国に行くことを望んでいました。しかし、ソ連は、(今はロシアなどいくつかの国に分かれています。)第三国のビザを持っていない限り、シベリアを通ることは認められませんでした。そこで、日本やほかの国のビザがどうしても必要になったのです。

ドイツでは、指導者がただユダヤ人だという理由だけでヨーロッパ中のユダヤ人を殺してしまおうと考えていることを千畝さんも知っていました。それは、人道上から考えて許されることではありませんでした。

おびえた眼で祈るように千畝さんを見つめているユダヤ人の人を見ていると、その悲しみとおそれる気持ちが千畝さんの心に伝わってきました。

ビザを発行する千畝

千畝さんは、これは大変なことになったと思いました。そのころ、日本はもう中国と戦争を始めていました。そのため外国の困った人たちをかばう余裕はありません。日本を通過してほかの国へ向かう人にビザを出す時には、行く国の入国許可をもっていること、そして、そこへ行くための十分なお金を持っていることが絶対必要なことでした。

日本の政府は、逃げていく人たちが、その先に行けないまま日本にいられては困ることを考えていたからです。また、そのころ、日本はドイツに味方して、ドイツ・イタリアと同盟(外国との約束)を結ぼうとしていました。多くのユダヤ人の命を守る行動をとれば、ドイツのやり方にそむくことにもなります。

ユダヤ人たちは、「カリブ海にあるオランダの植民地のキュラソーという島ならば行ける。お金はアメリカなどに住んでいるユダヤたちが集めて送ってくれます。」と言つて、彼らを助けようとしたオランダの外交官たちが作ってくれたキュラソーへ行くための書類を見せました。しかし、オランダはもうドイツに占領されています。オランダの証明書がどこまで通用するのかわかりません。それにこんなに大勢の人たちの遠い国へ行くために必要な、たくさんのお金がすぐに集まるとも思えません。

「日本の外務省はユダヤ人たちにビザを出すことを許さないかもしれない。」と千畝さんは、そう思いました。

「やがて、このリトアニアは、ソ連に占領される。今、ビザを出さなければ、目の前にいるユダヤ人たちは行く所を失い、つかまえられ、殺されてしまうかもしれない。」と千畝さんは考え、迷いました。

「国のやり方はどうであれ、私は人間としてこの人たちを見放すことはできない。」と思いました。

千畝さんは、さつそく東京の外務省に電報を打ちました。

「ユダヤ人たちはどこへ行くのか。正規の手続きができていなくて入国許可証をもっていない者には、ビザを出してはいけません。」という返事がきました。

千畝さんはあきらめずに何度も電報を打ちました。しかし、答えは「規則を守ってビザを出すように」というものばかりでした。

千畝さんは、もう自分の決心を変えずに突き進むことにしました。

ユダヤ人を一人ひとり領事館の中に入れて、その名前を聞いてビザを書く仕事を始めました。

一枚一枚その人のパスポートを調べ、名前・年齢・職業・家族、行き先とその目的などをペンを使って調べをつくり、ビザを書かなければなりませんでした。

毎日、朝から晩までビザを書きます。

次の日も、またその次の日も書き続けました。多くのユダヤ人たちが領事館の外で待っていると思うと、食事をする時間も惜しんで書きました。

いくら頑張っても、一時間に一〇人をこなすのがやつとの仕事です。一日に十時間書いたとしても、やつと一〇〇人。外には、千人を超すユダヤの人たちが待ち続けていました。

指も腕もからだも疲れ、睡眠不足で頭がもうろうとしてしまいスピードも遅くなってしまいます。

千畝さんは、それでもユダヤの人たちのために書き続け、一日二六〇枚のビザを書いた日もありました。そして、八月二日には、東京の外務省から領事館を閉めてドイツの大使館に移るよう命令が出ました。

それでも、千畝さんは、机に向かって書き続けたのです。約二ヶ月の間に四五〇〇枚ほどのビザを書きました。

ビザをもらったユダヤの人々とその後の千畝

千畝さんからビザをもらったユダヤ人たちは、リトアニアからソ連に入るとシベリア鉄道に乗って長い長い旅に向かいました。

ウラジオストクから、日本の船に乗り日本の敦賀港に着いたユダヤ人たちは、その後、神戸、横浜から、自由の国アメリカなど世界各国へと渡って行きました。

ドイツ・イタリア・日本が戦争に敗れ戦争は終わりましたが、ユダヤ人が殺されたという話を千畝さんは聞きました。でも、千畝さんと幸子さんは心からユダヤ人の無事を祈っていましたので、あの時ビザを書いてよかったと思いました。

千畝さんは、戦後（戦争が終わった後）幸子さんと二人の子どもを連れて日本に帰ってきました。

普通外交官はすぐに帰れるものですが、千畝さんたちはなかなか帰ることを許されず、帰ることができたのは、戦争が終わってから一年半もたっていました。

外務省に行くとすぐにやめることを勧められました。そして、「君の仕事はもうない」と言われました。理由は教えてもらえませんでした。千畝さんは日本の外務省の命令を聞かないでビザを出したからだと思いました。

しかし、千畝さんは、

「私は、たとえ少しでも、ユダヤ人を助けたのだ。」

と、そのことを誇りに感じながら、いざぎよく勧めに従い外務省を辞めました。

諸国民の中の正義の人 千畝

1969年（昭和44年）イスラエルは、「イスラエル建国の恩人」として千畝さんを表彰しました。千畝さんは、初めてイスラエルを訪れ千畝さんのビザによって助けられ当時宗教大臣となっていたバルファアティックさんから勲章をもらいました。

1985年（昭和60年）イスラエルは、千畝さんを「諸国民の中の正義の人」として再び表彰しましたが千畝さんは八五才、身体が弱ってイスラエルに行くことができませんでした。千畝さんは、1986年（昭和61年）鎌倉で亡くなりました。

八百津町は、千畝さんの人道的なおこないをたたえるとともに、ずっと先まで千畝さんの行ったことを残すために「人道の丘公園」をつくりました。

出典「わたしたちのまち 八百津」 八百津町 小学校社会科副読本

（昭和五十七年三月三十一日初版発行 平成二七年三月三十一日改訂二版発行

八百津町教育委員会）